OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	高知出身者による方言小説とその言語 : 室津鯨太郎『南国』を事例として
Author(s)	北﨑, 勇帆
Citation	語文. 2026, 124-125, p. 110-98
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/103859
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

高知出身者による方言小説とその言語

――室津鯨太郎『南国』を事例として――

北　﨑　勇　帆

1. はじめに

迫野（1998: 6-8）は、「地方語文献」を大きく以下（1）の 2 種に区別し、さらに、（1b）に典型的なものを（2）の 3 種に細分化する。

（1） a. 方言を対象化して、観察的に記録したもの
　　b. その他の一般文献に、たまたま方言が反映しているもの

（2） a. 地方の人の手になるため、口頭語の反映がそのまま執筆者の方言になっているというもの
　　b. 方言文学のように、ある効果をねらって意図的に方言を取り入れたもの
　　c. 外国人の記録した日本語が方言であったもの

本稿で扱う高知方言[(1)]を反映する歴史的資料としては、土佐藩士の幕末書簡がよく知られるが（諸星1997、上野2018）、これを除くと、文法研究に使用可能な資料は決して多くない[(2)]。こうした中にあって、近代に刊行された小説類は、純粋な自然談話の筆録・再現とは考えにくい側面はあるもの[(3)]の、なお、方言史資料としての検討が行われてよいように思う。本稿では、室津鯨太郎『南国』（南人社、大正14［1925[(4)]］）を題材として、資料の紹介とそこに現れる言語についての検討を行う。

2. 室津鯨太郎『南国』

室津鯨太郎は、刀剣鑑定家、川口陟［1883-1964］の筆名。氏の『刀剣雑話』（南人社、大正14）には、松平頼平（常陸の華族、刀剣鑑定家）が序を寄せており、「（川口陟）君は、土佐室津の捕鯨地に生れ、自ら変名して室津鯨太郎と称す」と紹介される。自身も「私は少年の頃高知市帯屋町の下一丁目に住んで居た、其処から追手筋の土佐郡第一高等小学校へ通つた[(5)]」と回顧する通りの、高知の人である。

川口には他に、歴史・刀剣の著作に『秀吉論』（南人社、大正 5）、怪談集の『怪談情話』（大正 6、南人社）などがある。南人社は当初は川口の個人出版社であったようで、大正 10 年頃までは「東京市本郷区駒込千駄木町」、それ以降は「東京市下谷区池の端茅町」を所在地とする。川口の追悼文には「土佐の室津の生れ」（現在

の室戸市）で、「沖でクジラが穫れるので、ペンネームを室津鯨太郎と名乗っていた。青年時代、郷里の郵便局に勤めていたが、志を立てて上京し、万朝新聞や三越の宣伝部で文筆を揮った[6]」とあって、雑誌『三越』（1巻1号、明治44）の奥付（印刷者）にも川口の名前があるので、20代の間には東京に移っていたのであろう。

『南国』は、明治期の安芸郡浮津（現室津市浮津）の漁村の旧家、山上家（図1）の三代にわたる盛衰を描く長編小説。著者による序文では「時代の過ぎ去つた、古めかしい、然も特異な南海一漁村の家の記録を、今日社会問題の喧しく論ぜられる時代に、芸術として之を世に問はんとする」ことが展望として述べられる[7]。

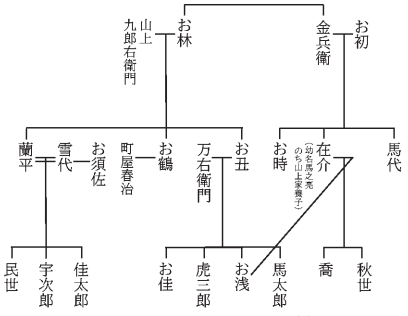


図1　山上家関係系図[8]

次例に示すように、本書からは、高知方言特有の語彙を豊富に拾うことができる。（3）漢字表記とルビによって意味の同定を可能にする場合、（4）圏点によって俚言であることを明示する場合、（5）括弧の注記によって意味を示す場合などがあって、語彙的なレベルでは、方言を他の箇所と区別して書こうとする意識が窺える。

（3）a. 御子息（とんと）さんまあ上つて遊んで行きなされや、（p.143）
b. 私家（わしく）もちつとは好（え）い事がなけりやのう、（p.204）
c. 之から生れて来る子は寒（ひや）いからのうし（p.24）
d. 喧しい、女性（ねつしやう）のくせに出しや張るものぢやないぞ、（p.67）
e. 根元（ねこすら）からないわい（p.97）
f. 然（やあ）、少々（ちく/\）やつちよります、（p.6）

（4）a. ありや、やちがない（p.110）
b. えゝ、黙つちよれ、小びんすがべちやくちや言ふな（p.159）
c. たかで大自慢じや（p.95）

（5）a. じようり（草履）を五十足も持て来（こ）にやなりませんのんし（p.207）
b. 色が白うて、眼が大きうて、まるでいちま（市松人形）のやうでございますこと（p.257）

他方で、後述するように、音韻・文法のレベルにおいては積極的に方言が使用されているようには思われない箇所もある。次節以降では、本書に見られる音韻・文法現象を概観し、この作品が、当時の高知方言をどの程度写実的に書こうとしたものであるのかを考えたい。

3. 音韻

伝統的高知方言には「四つ仮名」の区別が残ることが知られる。諸星（1997）、上野（2018）によれば、幕末の土佐藩士の書簡においては区別の意識が厳密であって違例はほぼ見られず、土居（1982）は昭和23［1948］年における30-64歳のうち、9割程度が四つ仮名を「区別し得る者」であったという。したがって、1883年生まれの著者も「区別し得る者」であった可能性が高いが、本書では「ぢ」表記が期待される箇所に「ぢ」「じ」表記のどちらの場合もあって、一定しない。ただし、アスペクトのチョルが撥音便によって濁音化する際には必ず「ぢよる」表記になるなど、語源意識が明確な場合は「ぢ」が優勢になる場合もある。

（6） a. 万右衛門→お丑 『汝（おんし）の事ぢやがねや、お丑』 （p.20）

b. 万右衛門→お丑 『なあに、己（おら）が体は鉄じや』 （p.25）

その他の特徴的な音声現象には、ラ行音の弱化（e.g. そうじゃろ＞そうじゃお）がわずかに1例見られる程度であり、格助詞の融合（e.g. めしを＞めしょー）は見られない。また、形態論にまたがる現象として、サ行イ音便、マ・バ行ウ音便や、一段動詞の語幹末母音の延長（きーて ‘着て’）の例もない。

（7） お丑→虎右衛門 『さあ、酒がえいじやう』 （p.39）

4. 文法現象

4. 1. 格・準体

本書では、属格の助詞にガが使用される場合がある。

（8） a. お丑→万右衛門 『なあに、己（おら）が体は鉄じや』 （p.25）

b. お林→蘭平 『在介が親類を廻つて来るがえい』 （p.52）

現代高知方言では、この格助詞に由来するガが準体助詞として用いられ、準体助詞ガは幕末の書簡にも確認される（諸星1997、上野2018）。よって、本書においても準体助詞ガの例が一定数拾えてよいように思われるが、確認できるのはノダに相当する以下（9）の3例のみであり、他の箇所は（10）のように、全てノが用いられる。すなわち、準体というカテゴリにおいては当時の口頭言語がそのまま反映されるわけではなく、方言形の使用が抑制されているようである。

(9) a. 万右衛門→丑『早う知つちよつたら、己(おら)も買うがぢやあつたけんど』 (p.20)
b. 佳太郎→お浅『そんな事いふて学問せざつたら人間になれんがや (p.275)
c. 宇次郎→お新『然(やあ)、私と兄さんとに五十円くれたがや』 (p.311)

(10) a. 春次→お竹・お六『蛇が別嬪に化けたりして居るのを抱いたりして、首を蛇に巻かれて寝ちよります』 (p.237)
b. お丑→万右衛門『御註進の来たのも知りませざつたよ』 (p.20)
c. 在介→お鹿『己(おら)がお前に頼みといふのは、内密(ないしよ)でお前の着物を貸して貰ひたいのじや、己は之から盆踊に化けて行く』 (p.109)

齋藤 (2023, 2024) によれば、武市瑞山の獄中書簡の準体助詞ガは、人・物を表す準体句を表す場合に限られており、事柄を表す準体句や、ノダ・ノデに相当する主節末・従属節末での使用は見られないという。(9) の例は、当期にガが主節末・従属節末で用いられるようになっていることを窺わせて、貴重である。

4. 2. アスペクト・テンス

現代高知方言では、動作の継続と結果の継続が形式的に区別され、前者に「連用形＋オル」に由来するユー、後者に「テ＋オル」に由来するチューが用いられる。土井 (1935) には、ユー (p.245)、チュー (p.146) の他、ヨル (p.246)、チョル (p.147) も併せて立項されており、ヨルからユー、チョルからチューへの形態の移行は、大正・昭和期を通して起こったものと考えられる。本書には (11) チョルと (12) テオル[(9)]の例があり、それよりも一段階前の様相を示している。

(11) a. 万右衛門 (心内文)『盗みが悪いといふ事を少しは知つちよるわえ』 (p.17)
b. 役場員→宇次郎『おりよう、小い坊(こまぼんち)さんも来ちよるの、 (p.144)

(12) a. 万右衛門→蘭平・在介『我家へ連れて来て火を焚いてぬくめて居ると、 (p.96)
b. 蘭平→在介『郵便が途中で何うなつたか、届いて居つてもそれから何うなつたか分つたもんじやない―― (p.366)

本書で奇異に思われるのは、ヨル・ユーの例がなく、(13) のような動作の継続であってもヨルではなくチョルが使用されており、アスペクトの 2 種の使い分けが見られない点である。しかし、例えば田中貢太郎 [1880–1941] の作品では、チョル・ヨルの使い分けが看取される。『南国』は当時のアスペクト形式の使用状況をそのまま反映しておらず、チョル・ヨルの使い分けを捨象しているようである[(10)]。

(13) a. 万右衛門→お丑『何を縫ふちよる、子供の着物かえ』 (p.24)
b. 蘭平→馬太郎『馬太郎、何をしちよるか』 (p.91)

(14) a.「すこし、いることがあつて、困(こま)つちよります、

（田中貢太郎『旋風時代』p.228）

b.「人にもらつたきに、つかひよるが、便利なものぢやのうし、　（同上）

過去否定にはザッタの例があり、これは瑞山書簡（諸星1997: 8）や昭和期の記述（土井1935: 89）にも見られる。本書ではザッタの他に共通語形のナカッタも用いられるが、丁寧語が共起する場合にはマセザッタとする傾向があり、マセンカッタ・マセンデシタなどの例はない。

(15) a. 万右衛門→慶左衛門『別に何とも言ひませざつた』　（p.9）

b. 万右衛門→在介『汝（こんた）は見なかつたかえ、八太郎が見たゞけか』　（p.136）

4. 3. コピュラ

当期のコピュラは、東京ではダが用いられる一方、大阪ではジャからヤへの移行期を迎えている（金沢1998）。幕末の土佐においては「士庶ともにヂヤ（ジヤ）を専ら使用していたことはほぼ間違いない」（諸星1997: 6）といい、本書の人物も総じてジャを用いる(11)。

(16) a. 慶左衛門→万右衛門『そりやお前さんの勝手じやけんど、　（p.9）

b. 蘭平→お林『何うでもいふがえい、悪い者は私じや』　（p.63）

この他、コピュラに類するものに、疑問文にのみ用いられる以下（17）のナラがあり、土居・浜田（編）（1985）（以下、『県』）では「…だ。体言またはそれに準ずるものに接続して、断定に疑問を含めたような意をあらわす。断定の助動詞「なり」に「や」の接続したものの変化形か」（p.441）とされる。岡山方言を中心に、文中の不定語に対して、節末述語が仮定形で呼応することが知られるが（虫明1958）、これと同様の現象である(12)。

(17) a. 万右衛門→お丑『どんな塩梅ならえ、もう間もなささうなかえ』　（p.24）

b. お林→皆『何（なん）ならえ』

お鶴→お林『何ならといふ事があるものか、其の顔は』　（p.252）

4. 4. 推量表現

高知方言において推量を担う形式の歴史については舩木（2000）に詳しい。まず、幕末書簡においては、動詞述語文の推量をロー、過去推量を主にツローが担い、名詞述語文はデアローがほとんどでヂャローの例はないという。そして、土井（1935）所収の用例でも、動詞述語文の推量にはローのみが見られ、マスロー、否定ローの例もあること、過去推量ではツロー・タローが、名詞述語文の推量にはヂャロー・デショーが併存することが述べられる。

本書では、動詞接続の場合にロー（の長音脱落形のロ）が現れる一方で、ジャローも併用される点、舩木の記述と齟齬する[13]。この点にもやはり、共通語（近畿方言）的現象が現れているものと思われる。

(18) a. お浅→春治『伯父さん癒りますろか』 (p.135)
b. お浅→お林『それまでには私は起きられるじやろか』 (p.250)

(19) a. 在介→万右衛門『そんなにせんでもえいじやろ、何うせ此処へ寄つたとは思ふて居りますろから』 (p.94)
b. 在介→宇次郎『そんなら受取があるじやろ、為替の受取を見せて見い』(p.372)

なお、ローとジャローの間には、丁寧語が共起する場合には「（ゴザイ）マス＋ロー」としてローを用い、常体の場合にはジャロを用いるという偏りが見受けられ、これは、4.2に述べた過去否定の事例と相似的である。過去推量の場合も、ツローはマスに接続する場合に使用されることが多いようである。

(20) a. 伴左衛門→お林『蓑や笠はお持ちなさいましつろか』 (p.67)
b. お浅→お林『さあ、何処へ行きましつろ』 (p.93)
c. 慶左衛門→万右衛門『然し、山上じや汝（おんし）に相談に来たろ、 (p.9)

4. 5. 可能表現

可能表現においては、母音語幹動詞にいわゆる「ら抜き」の例があることが注目される[14]。高知方言は「ら抜き」の発達が相対的に早いことが知られているが、一方で、「幕末土佐でラ抜き言葉が出現していたと見る蓋然性は低い」（三宅 2022: 223）という。本書にこうした例があることは、明治12年生まれの土井（1935: 249, 259）に「ら抜き」の記述があることともよく符合し、貴重である。ただし、これらの例を除けば（ラ）レルの使用が一般的であり、「ら抜き」の使用は抑制されている。

(21) a. 宇次郎→蘭平『それなら行て来れん事もない』 (p.352)
b. お浅→お林『それまでには私（あたし）は起きられるじやろか』 (p.250)
c. **……れる** 助動詞 ……られる（即ちらの省略）
「此着物ははでになったけんどまだ一二年は着れるろー。」（着られるだろう） (土井1935: 249)

4. 6. 複文

特に確定条件について、高知方言では、「「けれども」に相応するものに「ケンド」「ケンダー」」、「「ので」「から」に相当するものに、「キ」「キニ」「キン」「キー」「ケ」「ケニ」「ケン」などがある」（土居 1982: 24）など、原因・理由にキニ（現代では

キー・キ)、逆接にケンド類が用いられることが知られる。

本書の原因・理由形式にはキニ・カラと、少数のノデの例があるが、全体的に見れば、共通語と同形のカラが優勢（カラ171例、キニ26例、ノデ 7 例）である。

(22) a. お林→蘭平『そんな事をいふな、汝(をんし)には男の兄弟がないから、重之助を弟と思ふて可愛がつてやれ』 (p.218)

b. 春次→お林『あれじやきに、ほんまでございますぞのうし』 (p.238)

逆接条件もガの例が多いものの、ケンドも一定数あり（ガ147例、ケンド74例、ケレド22例）、同一発話にガとケンドが併存することもある。

(23) 雪代→宇次郎『これ此中に五十円あるから、之を二人に分けてやらうと思ふたが佳太郎が居らにやお前にやるけんど、お前一人にや多過るから、ついでの時に東京へ送つてやらんせ』 (p.300)

このカラ・ガは、一見すると共通語に引かれて現れたようにも見えるが、上記の記述が「俚言」のみを示すためにカラ・ガが伝統方言で使用されないように思われるのであって、自然談話でも、ガ・ケンド、キニ・カラは併用されるようである。

(24) a. イー。　タオ　ヒライテネ　ヤッチョルカ゜　マー　ナニヨ。
（ええ。田を開いてね やっているがまあ[F]何よ。）

b. イマ[n]デ　ユータラ　ハナシニ　ナラン　シンドー　シチョルケンド　ソノ　シンドー　シテ　ヤル　ヒトカ　ヤリヤト　ユーテ　ホメラレ　エライ　ヒトヨネ。
（今でいったら話にならない苦労しているけれど その苦労してやる人がやり手といって 誉められすごい人よね。）
（高知市行川・1907年生女性, 39_b_099,74690）

(25) a. マ　ヒヨーチント　ユーカヨ　ソレワ　コメニ　ヨッテー　サ[n]ダマッテイタキニ　ホラ　コメノ　ネダンニ　ヨッテ
（まあ[F]日当というかねそれは米によって定まっていたからほら[F]米の値段によって） （同, 39_b_099,35380）

b. マイニチ　ハツカ　カカルカラ　マイニチ　ハツカ　キテ　ヒライテクレテ　ホラ。
（毎日二十日かかるから毎日二十日来て開いてくれてほら[F]。）
（同, 39_b_099,32920）

4. 7. 対人配慮・談話的要素

本書には山上家に関係する人物が多く登場し、親子・夫婦・兄弟姉妹にとどまら

ない、バリエーション豊かな関係性での発話場が得られる。ここまでに見た諸現象に比して、対人配慮に関わる領域では、方言の使用が比較的抑制されていないように見え、この点は、本書が資料として持つ優越性のひとつと見てよい。以下に具体的な事例を 3 点示そう。

4. 7. 1. 人称・呼称

人称代名詞には、一人称代名詞に、ワタシ系としてアタシ・アシ・ワシ（と漢字表記の「私」）、オレ系としてオレ・オラ（と漢字表記の「俺」）、二人称代名詞には、オマエ（サン）系、オンシ（＜オヌシ）、コンタ（＜コナタ）、アンタが認められる。本書の登場人物のうち、発話の多いお林・蘭平・在介・お浅の 4 人の対話を抜き出し、互いの関係性と呼称を整理したものを表 1 に示す（左が一人称、右が二人称）。

表 1　4 人の親族呼称[(15)]

話＼聞	お林		蘭平		在介		お浅	
お林	—		母→長男		伯母→甥（・養子）		祖母→孫（・嫁）	
			オラ1, ワシ1, 「私」1	オンシ7, コンタ3, オマエ2, 「汝」1, 名前3	「私」1	コンタ1, 名前6	0	名前2
蘭平	長男→母		—		従兄→従弟（・義弟）		伯父→姪（・義妹）	
	ワシ4, 「私」2	オマエ2, オナンサン9, オナン1			オラ4, オレ1, ワシ1	コンタ4, 名前15	オラ3, 「俺」5	コンタ7, 「汝」3, オマエ4, 名前9
在介	甥→伯母（・義母）		従弟→従兄（・義兄）		—		夫→妻	
	0	オナンサン2, オバアサン2*	ワシ1, 「私」1	コンタ1, ニイサン4			オラ2	オンシ2, 名前3
お浅	孫→祖母（・姑）		姪→伯父（義兄）		妻→夫		—	
	アタシ2, 「私」1	オバア1, オバアサン2	アタシ3, 「私」7	オヂサン18	アタシ4, 「私」2	コンタ1, オマエ1, オマエサン2		

一人称代名詞については、若年層女性であるお浅がアタシ（と「私」）のみを用い、お林はオラも用いる。二人称代名詞では、コンタが上位者には使用されないこと、オマエが上位者にも用いられ得ることなどが興味深い（cf. 山崎 1963）。また、オンシは「お主。お前。親しい者同士が目下に対していう。（普通男子が使用）」（『県』p.119）とあるが、本書では女性のお林も使用する。当時は使用の性差がなかったか、もしくは「勝気なお林」（p.54）の性格を描いたものと考えられる。

4. 7. 2. 終助詞・間投助詞

共通語の「なあ」「ねえ」と類似する終助詞に、ノーシ・ネヤの例がある。ノーシは「「のー」を改まって使う場合に用い、やや敬意を含む」(『県』p.470)、ネヤは「高知市近傍では、ぞんざいな言い方」(『県』p.466) とあり、本書でも、この記述を裏付けるように、ノーシが用いられる相手にはネヤが用いられず、また、その逆も成り立つ[(16)]。ネヤの使用はほぼ万右衛門・蘭平・金兵衛などの男性に限られ、また、宇次郎・佳太郎などの若年層の男性は用いないという、性差・世代差も看取される。

(26) a. お丑→万右衛門『兄さんの用事といふのは何でございましたぞのうし』
万右衛門→お丑『汝(おんし)の事ぢやがねや、お丑』 (p.21)

b. 蘭平→重之助 (在介)『重之助、えい正月じやねや』
重之助 (在介)→蘭平『さうでございますのうし』 (p.50)

また、ノーシ (・ノシ) は、『県』では共通語の「ねえ。」と同義のものと説明されるが、以下の例は、その説明では理解し難い。

(27) a. 万右衛門→お丑『皆寝たかえ』
お丑→万右衛門『あい、もう皆寝ましたぞのし』 (p.19)

b. 雪代→万右衛門『有難うございますが今日は急いぢよりますから。また帰りに寄らせて貰ひませう、今日は佳太郎を始めて実家へ連れて行きます』
万右衛門→雪代『さうでございますかのうし、それは皆さんがさぞまあお待ちでございますろ』 (p.35)

c. 出入りの者→お林『かみさん、お目出度うございますのんし』 (p.204)

この他、終助詞には、ラ (<ルワ)、ワイの例がある。ラは「改まって他人行儀になり、余情を添えていうときに用いる」(『県』p.687) もので、本書でも、雇い主や家の「外」の人間に対してのみ使われる。なお、ワイには、近世江戸語 (田野村 1994)、愛媛県宇和島方言の高年層 (中川 2019) にも存する「意志形+ワイ」の例があることも注目される。

(28) a. 伴左衛門→在介『然(やあ)、直きに直りますら、』 (p.183)

b. 蘭平→岡部 (捕鯨組の主任)『まあ宜しうございますら』 (p.142)

(29) a. 万右衛門→在介『さうか、それぢや郷へ使をやつて置かうわい』 (p.94)

b. 蘭平→お浅『銭を送つて買うやうにいふてやろわい』 (p.348)

ノーシ系の終助詞は現在利用可能な談話資料からは得にくく、ワイは『県』(p.697) では「廃語か」とされる。終助詞類は、吉田 (1982: 443) や土居 (1982: 25) では、それぞれ「文末助詞」「添意表現」として形式が列挙されるのみであり、こうした状況にあって、本書は有益なデータを提供する。

4. 7. 3. 行為指示表現

行為指示表現の分析においては、話し手の属性や、聞き手との社会的関係性に応じた使い分けが観察され得るが、一方で、話題設定型の自然談話ではそうした細かな関係性を設定することが難しく、また、そもそも行為指示の例自体が得られにくいことが経験的に知られている[17]。本書は、様々な話者・関係性による談話場が形成されるため、行為指示表現のバリエーションも多様であり、(30)「連用形命令」の例や、(31) に示すような形式が得られる。

(30) a. お浅→清菊『沢山はないが、まあ差向き少しでも持て行き』 (p.466)
b. お浅→伴左衛門『そんな心配は入らんわえ、私(わし)の心じや取つて置き』 (p.475)
c. お林→在介『いんや、宇次郎の顔を見い』 (p.200)
d. お丑→馬太郎『馬太郎、父さんを呼んで来(き)』 (p.92)

(31) a. お浅→お須佐『まあ姉さん、お腹も立ちますろけんど、お気にせずにおいで下さいませ』 (p.459)
b. お浅→八太郎『何ぼか分らん、之を見てくなんせ』 (p.450)
c. お林→伴左衛門『伴左衛門、少し追ふてくりやれ』 (p.160)
d. お丑→在介『鯵の大漁で、浜一ばいの鯵じや、行て見てごんせ』 (p.93)
e. お初→馬代『馬代、お前は団扇を持て来て父(とう)さんを後からあほがんせ』 (p.123)
f. 在介→お時『お時よ、お前はな、姉さんと二人で団扇を持て来て、お肴の蠅を追ふておうせ』 (p.129)[18]

4. 8. その他

さらに雑駁になるが、他に目についた例を示しておく。

(32) a. 岡部→蘭平『いや、お忙しさうじやからまた来ます、自分が退窟なと人も同じやうに思ひましてな』 (形容動詞のナ終止形、p.142)
b. 宿の女主人→お浅『郡役所のお役人で城下へお出る方に、 (「オ」敬語、p.446)
c. 宇次郎→在介『之をお父さんが持て行け言ひました』 (助詞ト不使用の引用、p.289)
d. 蘭平→お浅『お浅よ、港の上の皁頭(はとば)へな、重之助の記念碑を建てゝくれると、さうなつたら重之助も偉いもんじや』 (伝聞のト、p.435)
e. お浅 (独話)『何うしたか知らん』 (疑念を表すカシラン、p.403)
f. 雪代→蘭平『何ぞおいしい物を拵へて持たせてやります』(不定語＋ゾ、p.141)
g. 在介→お林『そりやさうじや、義兄(にい)さんじやち後(あと)を貰はんといふ訳には行かんのうし』 (逆接仮定条件のチ、p.235)

h. お浅→伴左衛門『そんなに言はいでもえいじやないか、汝(こんた)じやち休んだらえいじやないか、賃は賃でやつちやる』　（否定接続のイデ、p.242）

5. おわりに

以上、本稿では、室津鯨太郎『南国』を対象に、本書に見える当期の高知方言の描写について検討した。

本書には、サ行イ音便の不在（→3）、準体助詞ノの使用（→4.1）、ナカッタ（→4.2）・ジャロー（→4.4）の使用など、方言使用の抑制と共通語使用の傾向が窺える。また、体系のレベルでも、アスペクト（→4.2）において、形式としては方言形を用いつつ、進行態・結果態を区別しないなど、高知方言を写実的に写したとは考えにくい点もある。

しかしながら、利用可能な方言史資料が限られる中で、準体助詞ガ（→4.1）や「ら抜き」（→4.5）の例がわずかながらでも得られることなど、使用を抑制する中でも僅かに現れる方言形が、歴史的な証拠としての価値を有することはある。また、本書は「家」の盛衰を描いたものであるから、配慮や直示などの、談話資料からは得にくい言語現象の例を豊富に提供する（→4.7）。以上のような点を吟味すれば、小説の方言史資料としての価値を定位することは、十分に可能であろうと思われる。

注

（1）高知県下の方言は「東ことば」（県東部・中部、高知方言）、「西ことば」（県西部、幡多方言）の2つに大きく分かれるが（土居1958など）、本稿では前者を扱う。

（2）例えば、谷秦山［1663–1718］やその子垣守［1698–1752］を中心とする神道・国学の講義類は、当時の学問共通語的性格が強いようである（吉野1967）。

（3）例えば近畿方言について、安井（2010）、村中（2020）など。

（4）国立国会図書館デジタルコレクションで公開されている初版本（https://dl.ndl.go.jp/pid/1019253/, 大正15年5月12日印刷、5月15日発行）。高知県立図書館にはこれと同一の初版本が2冊（資料コード1102068754, 近森文庫3986）と、第5版（同年7月15日刊、資料コード1107293415）が所蔵されている。稿者架蔵本に、この第5版の他、第3版（同年6月5日刊）、第6版（同年8月31日刊）がある。重版の間隔は短く、初版における誤脱や、注7に述べる差別描写は第6版でも改められていない。本書の文学史上の評価については岡林（1964: 175–176）などがある。

例の引用に際しては、異体字を通行字に改め、会話の話し手と聞き手の情報を補った。

（5）「土佐人と刀剣」『刀剣随筆』南人社、昭和2、p.215.

（6）中宮敬堂（1964）「川口陟先生の死を悼む」『刀剣と歴史』419.

（7）この叙述の方針に起因して、本書には被差別部落に関する描写が見られ、同年6月6日に高知県水平社の糾弾を受ける。『読売新聞』7月12日付夕刊では「続編も含めて評価してほしい」旨を主張したものの、翌週には翻意して謝罪状を掲載したという（吉

田2011: 89–91）。

（8）「山上家関係系図」（p.138）から中心的な登場人物を抜き出し、解読しやすい形に改めた。なお、在介は川口の父の川口在祐、お浅は母の政、喬は陟本人をモデルとするという（1989年7月11日『高知新聞』、「ふるさとの先人・孤高の文士 室津鯨太郎（川口陟）」による）。

（9）本書に「居た」「居て」の例はないので、「て居る」はイルではなくオルと見る。

（10）チョルの他に、卑語的な「連用形＋オル」の使用も僅かに見られ、この点は京阪方言と似る。

(i) お林→在介『それで何と言ふたら、白状をし居つたか』 (p.165)

(ii) 金兵衛→圖平『弥七か、弥七はなか／＼自状し居らん』 (p.167)

（11）なお、物語終盤に現れる「清菊」という人物は、コピュラにヤを用いる。清菊は宇次郎の妻で、「徳島女」であるというが、「おます」「さかい」などの使用からも分かる通り、この発話は明らかに徳島方言の再現ではない。ステレオタイプ的な大阪方言を喋らせることによって、「高知方言話者ではない」ことを表現する意図を持つものと考えられる。

(iii) 清菊→お浅『さうだつか、それならわて姉はんにお願ひがおますがな』（略）『姉はん、わて死んでもかまやへんけんどな、腹の此の子が可愛さうやで』 (p.465)

(iv) 清菊→お浅『へえ、二人で寝てゐましたんやけんど、ひだるうなつてかなはんさかい、姉はんに無心に来ましたんや』 (p.466)

（12）三宅俊浩氏（愛知学院大学）の教示による。

（13）なお、推定を表すニカーラン（＜に変わらん）の例はない。

（14）「居れる」の例もあるが、本書で用いられる存在動詞はイルではなくオルなので、この例は可能動詞の「おれる」と見る。

(v) 宇次郎→お浅『銭は隠して持つて居れるから可いいふたら、 (p.335)

（15）在介からお林に対するオバアサンは、お林が危篤状態の際の発話で、例外的である。

（16）なお、ガとキニは助詞ノーシと併せて使われやすいようである。次節での検討を併せて考えると、ガ・キニはケンド・カラよりも改まった場で使用されやすいということであろうか。

(vi) お浅→清菊『そりや宇次郎は阿呆じやけんど、清菊さんには別に腹も立たんがのうし』 (p.465)

(vii) お林→お須佐『それから之が重之助の嫁のお浅と言ひます、我侭者じやきにのうし、宜しうお頼み申します』 (p.256)

（17）例えば、「自然談話は「昔語り」になりがちで、命令表現や依頼表現の出現頻度が極端に低い」（白岩2018: 150）など。

（18）テオーセは現代ではトーセとなる。「負ほす」（「負ふ」の他動詞化）の命令形に由来するものか。

参考文献

上野智子（2018）「『武市瑞山獄中書簡妻及び姉・妹あて』の中の高知方言」『高知人文社会科学研究』5, pp.1–26.

岡林清水（1964）『高知県文学史』高知市立市民図書館.

金沢裕之（1998）『近代大阪語変遷の研究』和泉書院.
齋藤香織（2023）「高知市方言における準体句と準体助詞ガの通時的変遷（１）」『高知大国文』54, pp.78（64）-110（32）.
齋藤香織（2024）「高知市方言における準体句と準体助詞ガの通時的変遷（２）」『高知大国文』55, pp.65（30）-96（61）.
迫野虔徳（1998）『文献方言史研究』清文堂.
白岩広行（2018）「７時間の談話資料からわかること―福島県伊達市方言の受身関連表現―」『立正大学文学部論叢』141, pp.137-152
田野村忠温（1994）「終助詞の文法―江戸語資料に見る終助詞の体系性―」『日本語学』13（４）, pp.94-112.
土居重俊（1958）『土佐言葉』高知市立市民図書館.
土居重俊（1982）「土佐の方言」山本大（編）『高知の研究 6 方言・民俗編』清文堂出版, pp.1-40.
土居重俊・浜田数義（編）（1985）『高知県方言辞典』高知市文化振興事業団.
土井八枝（1935）『土佐の方言』春陽堂.
中川寛之（2019）「愛媛県宇和島市の方言文末詞「ワ」・「ワイ」」『国文学』103, pp.454-439.
舩木礼子（2000）「幕末以降の土佐方言における意志表現・推量表現形式の変化」『地域言語』12, pp.1-12.
三宅俊浩（2022）「四国地方におけるラ抜き言葉の方言分布と解釈」中部日本・日本語学研究会（編）『中部日本・日本語学研究論集』和泉書院, pp.209-228.
虫明吉治郎（1958）「疑問詞の係結―中国方言の場合―」『国語学』34, pp.81-93.
村中淑子（2020）『関西方言における待遇表現の諸相』和泉書院.
諸星美智直（1997）「武市瑞山文書から見た土佐藩士の言語について」『国語学』191, pp.1-13.
安井寿枝（2010）『谷崎潤一郎の表現―作品に見る関西方言―』和泉書院.
山崎久之（1963）『国語待遇表現体系の研究』武蔵野書院.
吉田則夫（1982）「高知県の方言」飯豊毅一・日野資純・佐藤亮一（編）『講座方言学 8 中国・四国地方の方言』国書刊行会, pp.425-449.
吉田文茂（2011）「高知県水平社と国沢亀」『部落解放研究』191, pp.81-94.
吉野忠（1967）「宝永時代（18世紀初頭）土佐言語管見―「嘉言」講録を資料として―」『高知大学教育学部研究報告 第１部』19, pp.1-14.

付記　本稿は、JSPS科研費23K12192の成果の一部である。

（きたざき・ゆうほ　本学准教授）